

ボーン・アルティメイタム

2007(平成19)年9月19日鑑賞(試写会・リサイタルホール)

★★★



監督＝ポール・グリーングラス／原作＝ロバート・ラドラム『最後の暗殺者』（角川文庫刊）
／出演＝マット・デイモン／デヴィッド・ストラザーン／ジョアン・アレン／ジュリア・ス
タイルズ／スコット・グレン／パディ・コンシダイン／エドガー・ラミレス／コリン・ステ
イントン／ジョーイ・アンサー／アルバート・フィニー（東宝東和配給／2007年アメリカ映
画／115分）

第3章

ヒネリの効いた設定・ラストが新鮮！

……CIA 誕生秘話を描いた『グッド・シェパード』（06年）と同時期に、CIA から追われ対決する『ボーン』シリーズの最終章が公開されるのも皮肉なもの……？ 世界を股にかけ、鳥人アクションをこなし、最後はニューヨークへ戻ったジェイソン・ボーンの失われた記憶は果たして甦るのだろうか……？ また、叩きつけられた「^{アルティメイタム}最後通告」の実行は……？ 予想もしなかった驚愕の事実が明らかにされた後、『ボーン』シリーズはホントに終了……？ それとも……？ さてあなたは、このラストシーンをどう解釈……？

完結編は誕生の秘話……？

『バットマン』シリーズの第5作『バットマン ビギンズ』（05年）、『スーパーマン』シリーズの第5作『スーパーマン リターンズ』（06年）は、いずれもバットマンとスーパーマンの誕生の秘密に迫る物語だった。ちなみに『007』シリーズは、20作目の『007/カジノ・ロワイヤル』（06年）にしてはじめてジェームズ・ボンド誕生の秘話に……。

そうすると、第1作から記憶喪失状態で「自分探しの旅」を続けてきた、マット・デイモン扮するジェイソン・ボーンも、3作目の完結編ではジェイソン・ボーン誕生の秘話に……？

🎬 第1作からの皆勤賞は……？

ジェイソン・ボーンを主人公としたスパイアクションものである『ボーン』シリーズ全3作に通して出演している俳優は意外に少ない。ちなみに、監督も第1作はダグ・リーマンだったが、第2作と第3作はポール・グリーングラスに変わっている。

私は第2作の『ボーン・スプレマシー』を観ていないが、第1作『ボーン・アイデンティティー』では、「相棒の女優が魅力に乏しく残念」と書いてしまった（『シネマールム2』121頁参照）。その女性は、スイスのアメリカ大使館でジェイソン・ボーンが偶然知り合った女性マリー（フランカ・ポテンテ）だったが、彼女は第1作だけで打ち止め。また、第1作でCIA本部のテッド・コンクリンを演じたクリス・クーパーも第1作だけで打ち止めとなり、第3作で「ブラックブライアー（黒バラ）計画」の現場責任者であるCIAテロ極秘調査局長のノア・ヴォーゼン役で登場するのはデヴィッド・ストラザーン。

そんな中、第1作から第3作までを通した皆勤賞は、CIA内部調査局長のパメラ・ランディを演じるジョアン・アレンとCIAマドリード支局員のニッキー・パーソンズを演じるジュリア・スタイルズの2人の女優のみ……？

🎬 内部抗争はどこにでもあるが……？

アメリカ映画では女性の社会進出は華々しく、ジェームズ・ボンドの上司Mはジュディ・デンチが演じる女性。CIAでも、対テロ極秘調査局長でブラックブライアー計画の責任者は男性のヴォーセンだが、内部調査局長は女性のパメラ。シリーズ第3作は2人の皆勤賞の女性がキーウーマンになるが、その第1がこのパメラ。ブラックブライアー計画を推進しあくまでジェイソン・ボーンを抹殺しようとするヴォーセンと、ジェイソン・ボーンに同情的なパメラは、次第に対立を深めていくことに……。

組織はさまざまな部局から成り立つものだが、その部局ごとにあるいは部局の責任者同士に対立が生まれることは、一般的によくないこととされている。しかし、私が思うに、それによって意見の相違や価値観の対立が明確となって、一方の部局やその責任者による暴走を押し止め、結果オーライとなることもあるから、必ずしも組織内の内部抗争は悪いばかりではないのでは……？

今回、パメラがヴォーセンのチームを補佐することになったのは、前作でも残忍な

アポット局長と対立してジェイソン・ボーンに同情するようになったパメラが、ジェイソン・ボーンについてのエキスパートと判断されたため。しかし結果的には、パメラがジェイソン・ボーンに協力し内部情報を漏洩したことによって、ジェイソン・ボーン抹殺の計画を内部からぶっ壊されたわけだから、ヴォーセンにとっては何とも歯がゆいもの。これはいわば、明智光秀に裏切られた織田信長の心境、あるいは小泉純一郎総理によってぶっ壊されてしまった自民党守旧派の面々の心境では……？

第2のキーウーマンは……？

皆勤賞ながら第1作ではあまり存在感のなかったニッキーが、第3作ではジェイソン・ボーンの記憶回復に大きく寄与するキーウーマンに……。スパイアクション映画は、どうしても主人公の任務遂行がストーリーの中核になるため、恋模様はちょっとした彩りを添えるだけになってしまうのは仕方ないが、シリーズを通してこのニッキーの存在は中途半端であいまいなもの……。第3作でもそれは基本的に変わらないが、そのウエイトは格段に増している。

ジェイソン・ボーンがスペインのマドリッドに飛んだのは、殺された記者ロス（パディ・コンシグダイン）が書いた記事の情報提供者がCIAのマドリッド支局長ダニエルズ（コリン・スティントン）だったことを、ロスの取材メモから探りあてたため。既にそこにはダニエルズの姿はなかったが、支局員のニッキーがおり、ニッキーの協力を得て、ダニエルズが身を隠すモロッコのタンジールへ向かうことに。ちなみに、その間の2人の会話や見つめ合う視線に注目……。記憶を喪失した男というのは何かと扱いが難しいものだが、一定の時間を共有すればやはり何か思い出すものが……？

そんな束の間の楽しい2人旅（？）もタンジールに到着したとたん、ダニエルズは新たな殺し屋デッシュ（ジョーイ・アンサー）が仕掛けた爆弾によって殺されてしまったうえ、ニッキーにも大きな危機が……。ここでジェイソン・ボーンと殺し屋デッシュとの間にくり広げられる鳥人バトルが、この映画の大きな見モノ……。

カメラマンも大変……

『グッド・ウィル・ハンティング／旅立ち』（97年）や『レインメーカー』（97年）でどちらかという繊細なイメージで一躍人気者となったマット・デイモンが、突然筋肉を鍛えあげ、マーシャルアーツの格闘技を学んで挑戦したのが、ジェイソン・ボ

ーンの役柄。したがって、このシリーズの売りは何ととってもハードなアクションシーン。といっても、だんだん派手になっていった『007』シリーズのジェームズ・ボンドのように最新の華々しいハイテク武器は使用せず、頼るはおのれの五感と肉体のみ……。最近リュック・ベッソン監督が脚本・原案を書いた『YAMAKASHI』（01年）やジュリアン・セリ監督が監督・脚本を担当した『MAXX!!! 鳥人死闘篇』（04年）などの「鳥人アクション」が注目されているが、今回マット・デイモンは、これらの鳥人と同じように、屋根から屋根へとジャンプする空中アクションにも果敢にチャレンジ……。とりわけモロッコのタンジールで、ダニエルズが爆弾で殺された後、約10分間にわたって展開される民家の屋根から屋根へそしてアパートの窓から窓へ次々とジャンプしながらくり広げるジェイソン・ボーンと殺し屋デッシュとの死闘は圧巻。こりゃ演ずる俳優たちも大変だが、それを撮影するカメラマンも大変。スクリーンが乱れたり揺れたりしているのは、カメラマンの持つカメラが揺れているためだが、そんな乱れや揺れを逆に存分に楽しまなくちゃ……。

エキストラは何千人……？

鳥人アクションとともに『ボーン・アルティメイタム』で目立つのは、群衆の中での追跡劇。CIAの組織をあげて捜し出そうとする、「ブラックブライアー計画」部隊の追跡から逃れるためのジェイソン・ボーンの方策は、何よりもまず群衆の中に紛れ込むこと。CIAとジェイソン・ボーンの陰謀についてのスクープ記事をイギリスの大手新聞「ガーディアン」に載せた新聞記者ロスとロンドンで接触したジェイソン・ボーンは、ロスに生命の危機が迫っていることを知らせるとともに、人込みの中に紛れて逃走しようとしたが……？

鳥人の後をカメラマンが追うのも大変だが、群衆の中を走るように抜けていくジェイソン・ボーンやロスの後を追うカメラマンも大変。そんな群衆の中での追跡シーンはロンドンのみならずモスクワでも、またニューヨークでも……。カメラマンさん、ホントにご苦労さん。それにしても、この映画で使われたエキストラの数は何千人？

さすが CIA はグローバル……？

8月30日に観た『グッド・シェパード』（06年）は、マット・デイモンを主役としたCIA誕生秘話に迫る壮大な物語だったが、そのマット・デイモンが同じ時期に公

開される『ボーン・アルティメイタム』では、CIAの極秘プロジェクト「トレッドストーン（踏み石）計画」によって暗殺のスペシャリストに鍛えあげられ、さらに「トレッドストーン計画」に代わる「ブラックブライアー（黒バラ）計画」の犠牲者として、CIAに対して「アルティメイタム」（最後通告）を突きつけるという物語の主演ジェイソン・ボーンとして登場するのも何かの縁……？ 「トレッドストーン計画」によって暗殺のスペシャリストに仕立て上げられるとともに記憶を消されてしまったジェイソン・ボーンは、必死で自分の記憶を取り戻そうと試みるが、「トレッドストーン計画」に代わる「ブラックブライアー計画」を主導しているCIAの対テロ極秘調査局長ノア・ヴォーゼンにしてみれば、「トレッドストーン計画」の秘密を知るジェイソン・ボーンは邪魔な存在だから抹殺すべき対象としたのは当然。

そこでジェイソン・ボーン抹殺のために彼を追う「ブラックブライアー計画」の部隊はモスクワからロンドンへ、パリそしてマドリッドからモロッコのタンジールそして最後にニューヨークへと世界を股にかけた追跡に。さすがCIAはグローバル……。

ジェイソン・ボーンはこれで見納め……？ それとも……？

ハリウッドとしては、『ボーン・アイデンティティー』（02年）、『ボーン・スプレマシー』（04年）、そしてこの『ボーン・アルティメイタム』と右肩上がりに興行収入を上げ続け、また今やハリウッドNo.1のギャラを誇る人気俳優に成長したマット・デイモンのこんなヒットシリーズを第3作で打ち止めにしたくないのは山々。しかし、自分の主義主張に忠実な（？）マット・デイモンは意外に頑固者だから（？）、やはり、これにてジェイソン・ボーンは見納め……？

この映画の最後の舞台はニューヨーク。パメラからの「4 - 15 - 71」という暗号（？）を易々と見抜いたジェイソン・ボーンが向かったのは、トレッドストーン計画の始まりの場所であるCIAの秘密研究所。そこに待ち受けているアルバート・ハーシュ博士（アルバート・フィニー）との「対決」が、シリーズ完結編の最後の見せ場。そこでハーシュ博士から語られる驚愕の事実とは……？

そして、その後包囲され、研究所の屋上に追い詰められたジェイソン・ボーンが行った、川の中への一大ジャンプは……？ これにてジェイソン・ボーンの身体が水の中から浮かびあがらなければ、ジ・エンドとなるはずだが、さて……？

2007(平成19)年9月22日記